

# e-dream-s 通信

No. 130 発行：2012年5月13日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

e-dream-s 通信5月号をお届けします。お楽しみください。

## 目次

- |                             |       |            |
|-----------------------------|-------|------------|
| 1. カンボジア・英語音声教材支援プロジェクト（報告） | 中川 房代 | p. 2 ~ 5   |
| 2. 先生のやる気                   | 辻 莊一  | p. 6 ~ 7   |
| 3. CMを考える「日本のどこかで」          | 井川 好二 | p. 8 ~ 14  |
| 4. 学びを守るバトン                 | 塚本 美紀 | p. 15 ~ 16 |



カンボジアの王宮（プノンペン）

# カンボジア・英語音声教材支援プロジェクト（報告）

中 川 房 代

5月はe-dream-sの事業年度の最終月。6月からは新年度がスタートする。

今2011事業年度はカンボジアへの具体的な教育支援に踏み出した歴史的な年となった。昨年3月の学校訪問から5月の調印式を経て、10月プノンペン郊外 Batheay High School への1,500冊の英語教科書支援プロジェクトが実現した。

今年2月には、井川顧問と佐藤さん、室山さんが再度 Batheay High School を訪問し、来年度のプロジェクトの方向性を話し合ってくれた。その結果、新たに San Dek High School に対して英語教科書の支援を行うこと、そして Batheay High School の英語の授業で音声教材を使えるよう支援する新たなプロジェクトを起ち上げるという2つの提案となり、4月15日、第39回理事会でこの2つのプロジェクトの実施を決定した。

英語の授業での音声教材の支援は、カンボジアの学校における英語教育の環境を整備していく上で、特に生徒のリスニング指導、発音指導に大いに役立つものである。カンボジアの公立学校には英語の Native Speaker の先生はほとんど配置されていないようであるし（いくつかはあるらしいと聞いたことはあるが）、専門でなく他教科との掛け持ちで、英語を教えている先生も少なくないと聞く。また、多くの学校には電気の設備がないため、CD プレーヤーやカセットテープレコーダーを使つての音声教材を利用することができない。

先週、ゴールデンウィークを利用して、辻代表理事と共にカンボジアを訪れた。今回のミッションは、2月の提案、4月の理事会決定を踏まえ、音声プロジェクトの具体的な実行計画を話し合い、その詳細を決定してくるということだ。

5月4日夜、3月末にカンボジアに帰国した Sokhom 理事ご夫妻や東京の大学に通っていた Sopha さんとも再会した。



Sokhom 理事ご夫妻、Sopha さんとともに  
(カンボジア料理のレストランで)

5月5日、朝6時に Sokhom 理事がホテルに迎えに来てくれ、彼女の運転で、Batheay High School に向かう。昨年10月の教科書贈呈式でカンボジアに来たときは、洪水の影響で道の両側にはかなりの水があったと聞かすが、半年以上が経ち、水はすっかり引き、今は道幅を広げる工事があちこちでされ、整備が進んでいた。

私たちが学校を訪れたのは5月5日。Ponleu さんからのメールでは、その日は学校が休みだが、校長先生と英語の先生が学校に集まってくれるという。授業がないので、生徒とは会うことができないと聞いていた。

5月5日はカンボジアでは「ヴィサック・ボーチャ祭（仏陀生誕記念日）」という祝日で、学校や会社なども休み。国民の8割が仏教徒と言われるカンボジアでは、近くの寺や信仰の山に登って祝うのだという。Sokhom さんの車の中からも、白のブラウスに黒っぽいロングスカートを履いた多くの女性が同じ方向を向いて歩いているのを見た。きっとお参りに行くのだろう。

学校に着くと...生徒がいた。Ponleu さんに聞くと、お父さんである校長先生が、私たちの訪問に合わせて生徒たちに登校するように、と計らってくれたのだそう。休みにも拘わらず、何と100名以上の生徒が私たちを出迎えてくれた。そして、中庭で集会が開かれた。校長先生のお話、そして私と辻代表理事のスピーチ。その後、生徒が皆の前に出てきて、英語でスピーチをした。30名くらいが次々に。

「教科書を贈ってくれてありがとう」「教科書が一人に1冊あり、家でも勉強できるようになって嬉しい」「英語が以前よりもできるようになった」「英語が好きになった」「もっと勉強したい」と。これで3度目の訪問なので、見たことのある生徒もいる。皆、顔を上げて、堂々と英語で話をする。少しはにかんで顔を真っ赤にしながらかた話す生徒もいる。笑顔がステキだ。英語で話ができることは気持ちに通じることだと実感する。教科書を支援してよかった！と、本当に嬉しい時間となった。



中庭に集まっている生徒

その後、校長先生、英語の先生とのミーティングを行い、音声教材支援プロジェクトについて、以下



のことが決定した。

1. Batheay High School の英語の授業で音声指導ができるよう、e-dream-s は、CD ラジカセ・カセットテープレコーダー6 台、電源として車のバッテリー6 台（接続のためのケーブルも含む）に掛かる費用を支援する。
2. Batheay High School の英語教師は、e-dream-s に対し、学校での CD ラジカセ・カセットテープレコーダーの使用状況を、学期に1 度、レポートを送る。（1 年間は2 学期制、前期は10 月から2 月、後期は3 月から7 月）
3. CD ラジカセは、2 台を日本から持ち込み（今回の訪問で持参）、残り4 台はカンボジア国内で購入する。（その日、プノンペンに戻って購入済み）車のバッテリーは、学校が準備し、その費用を e-dream-s が支払う。
4. その他必要なことは、Ponleu さんを通じて、協議する。

San Dek High School への教科書支援については、Ponlue さんから学年毎の必要冊数を知らせてもらうことになった。



左：プノンペンで購入した CD ラジカセ（東芝製）4 台。

右：合意書を持つ Batheay High School の校長先生と辻代表理事、英語の先生方、Sokhom 理事、Ponleu さん、中川

Batheay High School の先生方も、事前にどこかから CD ラジカセと車のバッテリーを準備し、その仕組みで CD ラジカセが動くかどうかのテストをしており、音声教材を使うことにとっても意欲的だった。

出会って1 年半ほどにしかならないが、校長先生、生徒、先生、とても近い存在に感じている。信頼関係が深まりつつあるのを感じる。これからも継続して関係を築いていけるといふ確信を得ることのできたカンボジア訪問となった。

# 先生のやる気

辻莊一

今回のカンボジア訪問の主な目的は、教科書を寄贈したバテイハイスクールの Cheu Senghuor 校長先生および英語科の先生方と CD プレーヤの導入について、話し合うことである。すでに導入すること自体は合意しているので、実際にいつ何台どのような形で導入するかが主な議題である。

5月6日（日）早朝6時、ヒマワリホテルまで迎えに来てくれたソコム夫妻の車に、中川副代表理事は大量のおみやげ、私は2台のCDプレーヤと太陽光充電のセットを抱えて乗り込んだ。当日は仏教の重要な祝祭日で、当然学校は休み、生徒は登校せず先生方も様々な行事があり忙しいということで、早朝の会議となったのである。途中で買った朝食用のパンを齧りつつ、バテイハイスクールに着くと、たくさんの生徒がいる。100人以上はいるようだ。休日のはずだがと思いながらも、Ponleu とその父親である Cheu Senghuor 校長先生と再会を祝した。すぐに会議かと思っていると校庭に案内される。校庭には椅子が並べられていてその前に生徒たちが整列している。座ると校長先生から何か生徒に話してくれと頼まれ、中川さんと私は急遽スピーチである。次に校長先生が指名した生徒が、寄贈された教科書に対する感謝の言葉を英語でしてくれた。休日にもかかわらず、わざわざこのためだけに生徒を集めてくれたのである。さらに一人で終りかと思うと、次々に校長先生が指名し全部で20名ほどの感謝のスピーチを聞くことになった。横に座っている校長先生を見ると目に涙が潤んでいる。

さて校長室で会議である。奥のテーブルに Cheu Senghuor 校長先生と私たち通訳役の Ponleu が座り、前に6人の英語の先生方が座る。こちらの予想としては6人の先生のうち2人は他教科の先生であるから、CDプレーヤは4台だけ寄贈するつもりでいたが、聞けば6人ともぜひ使いたいとのことである。専門外の先生は自分で英語を読みたくないという気持ちも強いかもしれない。ちゃんと使ってくれるのであれば、生徒のためになる。4台が6台になっても問題はない。

CDプレーヤ自体は高価なものではない。またCD自体も現地で教科書に即したものが比較的簡単に手に入るようだということは分かっていた。問題は電源である。多くの学校がそうであるようにバテイハイスクールの教室には、天井に電灯はない。また壁にコンセントもない。そのような状況の中でどのような形でCDプレーヤの電源を確保するか、決めなければならない。

オプションとしては、乾電池・太陽光で充電するシステムと充電池の2つを考えていった。もちろん乾電池がもっとも簡単な解決策であるが、年間の必要数を考えなければならないし、コストや使い捨てを続けることへの抵抗もあり、太陽光充電というアイデアが出てきた。こちらの腹積もりとしては、初年度は乾電池、徐々に太陽光発電へ切り替えで良いのではないかというものであった。カンボジア人で理事でもあるソコムからの話として、車のバッテリーのことも聞いてはいたが、どうも具体的に絵が浮かばない状況であった。

さて結論から言えば、太陽光充電池は試用してもらいながらも、大枠はカーバッテリーで電源確保とい

うことで合意した。理由は、電気の来ていない地域のカンボジアの家庭では広くカーバッテリーが電源として使われ定着しているということである。カンボジアの先生方によれば乾電池は一般的ではなく、逆に効果だということである。実際に他から借りてきた大きな CD プレーヤーとカーバッテリーのセットを見せてくれたが、カーバッテリーは片手ではとても持てないほど重い。これに加えて CD プレーヤーを教室に運ぶことに問題はないか聞くと、生徒が手伝うので問題はないとのことである。

かつてバテイハイスクールにはコンピュータが寄付されたことがある。しかし電源もインターネット環境もなく、また教師側の ICT の知識の問題もあり死蔵されているとのことである。e-dream-s が寄贈する CD プレーヤーには、そのような運命をたどってほしくはない。

実際は太陽光充電池のほうが使いやすいのかもしれない、また乾電池がカーバッテリーより効果かどうかはわからない部分もある。しかし、今回は教室で CD プレーヤーを使いたいという現場の先生側の熱意と、実際に使う先生方が抵抗なく使えるかを優先した決断である。

私達自身がカンボジアの学校で継続的に教えることはできない。カンボジアの英語教育は現地の英語教師にかかっている。そのために新しい機器を導入するときは教師にとっての慣れと利便性を考えることが非常に重要である。世界中どこでもよりよい教育を提供するためには、現場の教師の状況を把握して効果的なサポートすることで、より良い授業のための教師のやる気と工夫を引き出すことが、大事なのである。

# CM を考える 「日本のどこかで」

井川 好二

最近日本のテレビで放映されるCMで、ちょっといいなと思うものを紹介する。

日本のテレビはつまらないとは云え、毎日毎日日本全国で放送され、その番組の主流である民放のチャンネルには必ずCMが付いて回るのだから、何千何万のテレビCMの中に、ちょっといいものがあるのは、日本の現状にやや明るいものが感じられるのではないか。



ダイハツの企業CM「日本のどこかで」<sup>1</sup>

ダイハツ<sup>2</sup>の企業CM「日本のどこかで」シリーズである。今回はその第5弾「ドライブ篇」<sup>3</sup>を考えて

<sup>1</sup> 山梨県笛吹市八代ふるさと公園

<sup>2</sup>ダイハツ工業：自動車メーカー。1907年発動機製造設立、30年から自動車生産を開始し、特に三輪車メーカーとして発展、51年現社名に変更。64年に大衆乗用車発売。66年大阪事業部を分離してダイハツディーゼル設立、67年トヨタ自動車工業、トヨタ自動車販売と業務提携。68年ダイハツ自動車販売を分離（81年吸収合併）。70年旭工業を合併。98年、トヨタ自動車が出資比率を現在の34.4%から41.2%に上げたことに伴い、同社の傘下に入った。軽四輪の乗用車、トラックでは業界のトップクラスにあり、電気自動車の開発でも先駆的存在。[ブリタニカ2012]

<sup>3</sup> [http://www.daihatsu.co.jp/cm/3rd-ecocar/index\\_05.htm](http://www.daihatsu.co.jp/cm/3rd-ecocar/index_05.htm)

みよう。メッセージはシリーズを通じて「第3のエコカーを選びませんか？」つまり、ハイブリッド車<sup>4</sup>でも、電気自動車<sup>5</sup>でもない、第3のエコカー<sup>6</sup>である軽自動車を選びましょう。ちなみに、エコカーとは「低公害車」のこと。

ダイハツの社は、大阪府池田市で、地元の会社として、親近感は強い。

「軽自動車」は日本独自の4輪小型車の区分で、その昔は「スバル360<sup>7</sup>」が代表だったように、エンジンは360cc以下だったが、今は660cc以下となっている。広辞苑第6版によると、：

【軽自動車】道路運送車両法による自動車の種別の一つ。ふつう総排気量0.660リットル以下で、長さ・幅・高さがそれぞれ3.40メートル、1.48メートル、2.00メートル以下のもの。

不況下でしかもガソリン代が高止まりしている現在、エコ意識の高まりと期を一にして、軽自動車は売れ行き好調。特に地方では、軽が全保有車数の50%以上になっている地域もある。Wikipediaによると：

2011年3月末現在、「軽自動車の保有台数」の1位は愛知県、2位は福岡県、3位は埼玉県となっている。「全自動車に対する軽自動車の保有シェア」の全国平均は36.0%であり、沖縄県(53.5%)、高知県(52.3%)、長崎県(52.1%)、島根県(50.6%)、和歌山県(50.7%)、鳥取県(50.3%)において全自動車の半数以上を軽自動車が占めている。地方別ではシェアが高い順に、四国地方(48.0%)、九州・沖縄地方(45.7%)、中国地方(45.1%)、甲信越地方(43.3%)、東北地方(40.8%)、北陸地方(38.4%)、関西地方(35.2%)、東海地方(34.2%)、北海道地方(28.6%)、関東地方(26.7%)となっている。

過疎化が進行する地方では、公共交通機関が少なく、人々の移動は自家用車に頼らざるを得ない。そのため一家に何台も車が必要な場合がある。そういう地域で、軽が全保有車数に占める割合が高い。ちなみに、大都会である東京都では、17.7%、大阪府では、29.7%と、50%には程遠い。

---

<sup>4</sup> ハイブリッド車 hybrid car 原動機として内燃機関と電動機(モータ)を併用するハイブリッド・エンジンを用いる自動車。(ブリタニカ2012)

<sup>5</sup> 電気自動車 electric car (vehicle) 電池で走る自動車。静かで排気ガスがないのが利点。これが必要な用途には実用化されている。普及するには、長時間走れる蓄電池の開発と低価格化が課題。[株式会社有斐閣 有斐閣経済辞典第4版]

<sup>6</sup> 低公害車(ていこうがいしゃ)は、大気汚染物質(窒素酸化物や一酸化炭素、二酸化炭素など)の排出が少なく、環境への負荷が少ない自動車。狭義には電気自動車、メタノール自動車、圧縮天然ガス(CNG)自動車、圧縮空気車及びハイブリッド自動車の5車種を指す。低公害車の認定を受けた自動車は、税制面で優遇される等の特典を持つ。通称はエコカー(eco car)。http://ja.wikipedia.org/wiki/エコカー

<sup>7</sup> スバル360(Subaru 360)は、富士重工業(スバル)が開発した軽自動車である。1958年から1970年までのべ12年間に渡り、約39万2,000台が生産された。(Wikipedia)



ダイハツの開発した新型軽自動車は、ハイブリッドや電気自動車を上回るエコ性能を達成した。驚異のリッター30キロ。ダイハツのHPによると、「第3のエコカー」のテーマは：

「エコカーをみんなのものに」

ハイブリッドカーや電気自動車が築いてきたエコカーの時代。エコがすべての人に関わるテーマとなったいま、ダイハツは、「エコカーを、みんなが手に届くものにしたい」という思いを胸に、「第3のエコカー」を発表しました。新燃費測定モードJC08で30km/lの低燃費を、軽だからこそ低価格で実現した「第3のエコカー」が、みなさんのもとへ参ります。

このCMシリーズの第5弾は、都会から地方都市に移住して新しい仕事を始めた瑛太が、買ったばかりのダイハツ第3のエコカーで、知り合った吹石をドライブに誘う。このCMを3つのシーンを考えてみたい。

	吹石さん： 「で、どこ行くの？」
	瑛太さん： 「まだ考え中。」
	吹石さん： 「君はほんと迷うタイプだよね。」
	瑛太さん： 「でもとりあえず 前には進んでるよ。」

「君はほんと迷うタイプだよね」

まず、最初のシーンは、ドライブに出発した後、「で、どこ行くの？」と吹石に聞かれた瑛太が、「まだ考え中」。走りだしているのにその答え。そこで、吹石が、

「君はほんと迷うタイプだよ」と呆れる。

「迷うタイプ」は、現代の若者、あるいは男子の生き方を象徴している。そして、日本そのものの最近の姿を象徴しているのだろう。

瑛太は応えて、「でもとりあえず前には進んでるよ」と云う。「どこ行くの？」の答えにはなっていないが、分からないときは分からないと、物怖じせず話せるところに、若者らしい明るさがあるか。

尤も、瑛太は都会暮らしの足を洗い、付き合っていた都会の女とも別れ、この地方都市（実写は山梨県笛吹市<sup>8</sup>付近）に移り住み、新しい仕事を始め、アメ車のカマロ<sup>9</sup>を売って、「第3のエコカー」に乗り換えた。そういう意味で、「とりあえず前には進んでる」か。

二つ目のシーンは、吹石の一人暮らし宣言。

「私ね～、一人暮らしを始めるんだ。」と宣言する吹石に、瑛太は「親父さんよく許してくれたね」とあらぬ心配をするが、強面の父親渡辺は「俺たちを捨てるのか…」と情けない。泣きを入れる父親に娘は、「はあ？」とにべもない。

迷う男子に比べて、日本の女子に迷いはなく、信じた方向へ突き進む。

しかし、このシーンの見ものは実は母親で、この父娘のやりとりを聞きながら、笑い転げる。女子は誠に強いのである。

---

<sup>8</sup> 笛吹市（ふえふきし）は、山梨県の甲府盆地の中央部やや東寄りに位置する市。

2004年10月12日に東八代郡と東山梨郡の6町村が合併して発足した。市役所本庁舎は旧石和町にある。2006年8月1日には東八代郡芦川村を編入した。これにより東八代郡は消滅した。総人口70,367人 (Wikipedia)

<sup>9</sup> カマロ (Chevrolet Camaro) とは、ゼネラルモーターズがシボレーブランドで生産・販売している2ドアハードトップ、クーペおよびオープンカーの名称。名前の由来は古いフランス語で友達を意味する。カマロは現在5代目まで存在し、日本には2代目以降正規輸入が続いている。(Wikipedia)



「俺たちを捨てるのか・・・」

この CM シリーズの設定で、吹石は地元の郵便局か JA 山梨に勤める OL の役。瑛太も工事現場で働く若者である。学生ではなく、働く若者が直接のターゲットとして、焦点が当たっている点が、この CM の新しい点である。

そして、少子高齢化が急速に進行する日本で、若者と老人の自立は大きな課題だと言わざるを得ない。

だから、3つ目のシーンでは、吹石が「私も新しい生き方見つけなきゃ」と言い放つのである。

田舎生活を選び、古民家の再生を手伝い、「第3のエコカー」を選んだ瑛太の、生き方に習って、「君みたいに、新しい生き方を」と言う。



「私も新しい生き方見つけなきゃ」

おもしろいCMである。軽自動車への需要を喚起しつつ、現代の日本社会が直面する主要な問題点にも、さりげなく言及している。メーカーと視聴者が問題意識を共有するCMである。

そういう姿勢に共感するところが大きいため、数多くのCMの中から印象に残り、シリーズの続編を観たいと思わせるのであろう。

しかし残念ながら、軽自動車を買いたいと云う衝動は、まだ湧いてこない。(Saturday, May 12, 2012)



# 学びを守るバトン

塚本美紀



この春、23年間勤務した高等学校の教員の職を辞し、丘の上にある小さなミッション系の女子大学で勤務することになった。私が赴任した当初は桜、そして今は色とりどりのツツジやシャクナゲやバラが、狭いキャンパスのいたるところに咲いていて美しい。

そんな美しいキャンパスにも、存続の危機があったという。米国系の教会を母体とする学校であるため、戦時中は廃校を迫られることが多かったという。そしてついに、軍が使用するからという理由で校舎すべてが接収されてしまった。丘の上にある校舎は、街を見渡すのにちょうどいいが、敵のターゲットにもなりやすい。心齋橋の大丸や関西学院大学の校舎など多くの建物を設計したヴォーリズが設計した校舎は、無残なことに迷彩色に塗られてしまったそうだ。校舎がなくては教育活動も行えないので、廃校するしかないのではないかという圧力の中、近隣の旧制中学校、女学校、浄土宗のお寺が施設の利用を申し出てくれたお蔭で、学校を存続することができたという。

戦時中にお上の意向に逆らうことにどれ程勇気がいったことだろうかと思う。また、お寺にいたっては、その檀家が賛成しなければ受け入れることはできなかつたであろうから、市井の人々の懐の大きさを感じる。そして、どんな状況にあっても、学びの場を守ろうとした人々の強さに感銘を受ける。私の卒業した高等学校の前身がその女学校なので、巡り巡ってこの地にたどり着いた私は、より良い学びの場を作るよう、バトンを渡されたような気がして、身の引き締まる思いである。

昨年10月、e-dream-s からカンボジアの Batheay School に英語の教科書が寄贈された。そして、今年には新たな学校に教科書を寄贈し、Batheay School に対しては音声教材が使用できるよう環境整備を

するための準備が進んでいる。小さな第一歩ではあるが、子供たちにより良い学びの場を提供したいという気持ちは大きい。かつて先人たちがこの小さなキャンパスを守ることにご尽力くださったように、彼の地の子供たちの教育に対して、少しでも寄与できたらと思う。

<編集後記> カンボジアから帰国したばかりの中川副代表理事からの報告を読み、子供たちが教科書寄贈へのお礼を英語で述べたという場面を想像し、胸が熱くなりました。教科書からさらに音声教材へ、と発展する支援プロジェクトにより多くの支援が集まるよう、会員のみなさま力を合わせましょう。  
(道面和枝)